

4 ブドウの垣根整枝栽培で早期成園化

ねらいと成果

現在の短梢平棚整枝栽培は、生育期間中新梢管理や果房管理に両腕をあげたままの作業が多い。また、成園化するまでに最低5～6年を要し、初期収量が上がりにくい。そこで、省力的でかつ楽な姿勢で樹体管理ができる短梢せんだの垣根整枝栽培法を検討し、収量、品質等について調査した。

その結果、垣根整枝は株間5m、列間2.5mにすることで、平棚整枝に比べて幼木段階から多収となり、早期成園化が可能であった。また、垣根整枝は新梢を斜め上方に誘引するため、樹勢が強くなりすぎ品質低下をきたしやすいが、根域制限と組み合わせることによって、平棚整枝とほぼ同等の果実品質が得られることが明らかになった。

内容

垣根整枝は図1に示すような方法で行い、根域制限は透水性のある防根シートを用いた。植栽間隔は列間2.5m、株間5mまたは10m（当初5mで定植、樹齢5年目で間伐）で行った。供試品種は「ピオーネ」。

成園化率は成園時の主枝長に対する結果部主枝長の割合とした。株間5mは樹冠の拡大がはやく、平棚整枝に比べて約3年早く成園化した。株間10mでは樹齢5年目で間伐を行ったため、それ以降の成園化率は平棚整枝とほぼ同じであった（図2）。

10a換算収量は、株間5mでは樹齢3年（植付け2年目）には420kg（平棚30kg）、樹齢5年には1490kg（平棚960kg）と幼木段階から多収となった。5

年間の累積収量は、株間5mが平棚対比137%と多く、株間10mは平棚整枝とほぼ同等であった（表）。

垣根整枝の果実品質は平棚整枝と比べて果房重、果粒重に大きな差がなく、果皮色のカラーチャート値がやや低かったが、糖度、酸含量はほぼ同程度であった（データ略）。

今後の方針

大粒系ブドウの垣根整枝栽培における好適な水分管理、施肥管理等を検討し、高品質果実の生産技術を確立するとともに、生育、収量の推移をさらに継続して調査する。

福井謙一郎（中央農技・園芸部）

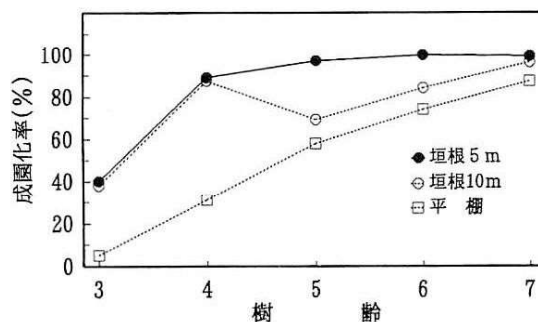


図2 各整枝法における成園化率の推移

表 各整枝法における10a当たり換算収量(kg)の推移

| 整 枝 法 | 樹 齢 | | | | | 累 積 収 量 (3～7年) |
|-------|-----|-----|------|------|------|-------------------|
| | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | |
| 垣根5m | 420 | 830 | 1490 | 2367 | 1740 | 6847(137) |
| 垣根10m | 322 | 814 | 783 | 1689 | 1762 | 5369(108) |
| 平棚整枝 | 30 | 430 | 960 | 1790 | 1780 | 4990(100) |

注) 10a当たり植付本数は垣根整枝5mが80本植、10mが40本植、平棚整枝は31本植。垣根整枝10mは樹齢5年に間伐。

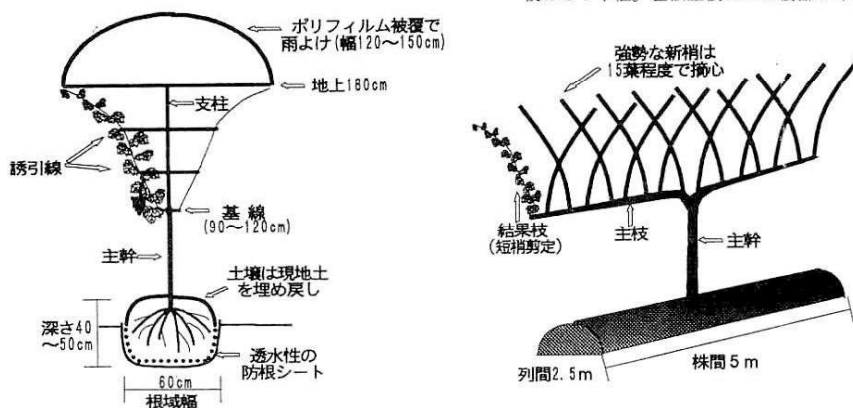


図1 垣根整枝の概要